第20回ＡＩＣＴ演劇評論賞

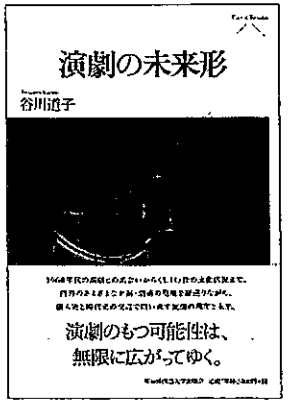
選考経過・選評・受賞の言葉

授賞作

演劇の未来形

（東京外国語大学出版会）

谷川道子



選考経過

ＡＩＣＴ演劇評論賞は、国際演劇評論家協会（ＡＩＣＴ）日本センターが、演劇・ダンス等の優れた批評を顕揚し、その発展を図るために、演劇・ダンス等の舞台に関する優れた評論書に贈る賞です。

第二〇回となる本年は、二〇一四年一月～十二月に刊行された書籍を対象とし、まずＡＩＣＴ会員によるアンケート投票により、一人三点まで候補作を推薦してもらい、上位二点を最終候補作として選考委員会にかけました。

最終候補作（タイトルの五十音順）

『演劇の未来形』（東京外国語大学出版会）谷川道子

『木下順二の世界――敗戦日本と向きあって』（社会評論社）井上理恵

今回の選考委員は、江森盛夫氏、小田幸子氏、喜志哲雄氏、西堂行人氏の四名（五〇音順）です。選考会議は三月二日に行われ、進行役として坂口勝彦が参加し、さらにＡＩＣＴ会長の新野守広が同席しました。議論が交わされた結果、谷川道子氏の著作への授賞に決定しました。詳しい評価は、各選考委員による選評をご覧ください。

また、最終候補には残りませんでしたが、アンケートで候補作としてあげられたその他の作品は以下の通りです（タイトルの五〇音順）

『煙管の芸談』渡辺保（幻戯書房）、『踊る人に聞く』山野博大（三元社）、『小幡欣治の歳月』矢野誠一（早川書房）、『現代イギリス演劇断章』谷岡健彦（カモミール社）、『身体は幻』渡辺保（幻戯書房）、『中国の「新劇」と日本』飯塚容（中央大学出版部）、『舞踏家は語る』志賀信夫（青弓社）、『幕が上がる』平田オリザ（講談社）、『忘れられた演劇』神山彰（森話社）

（坂口勝彦）

受賞のことば

谷川道子

リハビリから帰宅して授賞メールを拝読し、びっくりしました。

勤務先の大学での最終講義を基にまとめた我が人生の最終講義のようなパーソナルな本なので、こういう賞の受賞対象にはならないだろうと思っていました。文字通りのサプライズです。演劇の研究書でも評論集でもなく、教育論でも演劇論でも実践論でもなく、従来の演劇関連の書物のカテゴリーには入りにくい本でしょうから、演劇評論家の組織であるＡＩＣＴとしては、授賞をためらわれたのではないかと推察します。

でも、演劇とは個人史と時代史の交点の場で成立するものであり、だからこそ、ひとつのケーススタディとして、私にとって演劇とは何だったのか、ドイツ演劇研究で何をしようと願ったのか、何が見えて、何ができたのだろうと、私なりに考えてみたいと思ってのことでした。

本書で試みたのは、演劇の過去と現在と未来の交点、パーソナルとパブリックの交点、ローカル／日本とグローバル／ドイツ・世界の交点、ドラマ／戯曲とパフォーマンス／上演とシアター／劇場の交点の在り方を探ること。そして、演劇というテクストとコンテクスト／文脈において、さまざまな場所や連結点で媒介する多様な人たちをつなげて考えられるような回路をつくりたかったこと、でした。

演劇に未来形などないでしょうと言われたことに、私なりの反論の答え探しをしたいということもありました。『演劇の未来形』という無謀なタイトルは、負けてたまるかの我が気概で、きわめて個人的な営為ですが、こんな本があってもいいかなと。

授賞は、そういう私の演劇への思いを認めていただけたようで、なおさらに嬉しく思いました。

定年退職と二〇一一・三・一一と我がくも膜下出血手術と続いて、いろいろ考えることもあり、刊行も延び延びになり、でも、皆さんのおかげで生き延びて、こういう時を迎えられたことに感謝です。ありがとうございました。